



リステラス星圏史略  
古資料ファイル  
8 - 2



『惑星《緑》の物語』

(1990.12.21.  
~1991.01.03.)  
(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉

(設定資料)

---

(設定資料)

## ☆ 惑星《緑》における史略 (1990.12.21.)

---

### ☆ 惑星《緑》における史略。

2017年4月6日 リステラス星圏史略 (創作)

1990.12.21.

### ☆ 惑星《緑》における史略

... 惑星《緑》・《智慧の輪》戦線...

正確な移民年代は未詳である。リステラス星連繁栄期からエリスウェサ体制の瓦解に至るまでの期間、一方では更なる発展を願う人々が外へ未来へと歩を進めるかたわら、一方では史略者ラン、アグラス以来の祖源探求・自然回帰思想を実践しようとする人々も多く現われた。

クエラッツ第7惑星は《緑の一族》の血統・思想をひくと自称する人々が"再結集"した団体によって開拓された。全土を黄白色の荒砂が覆う不毛の惑星であり、太陽は緑色、極地帯にわずかに産する氷が最も貴重な天然資源という土地柄だった。

初期入植者達は古暦を用い、一切の寿命延長措置を放棄(?)し、いくつかの生物相と人力に頼って少しずつ開拓を続け、二期にあわせた放牧と農耕の半定住の生活を作り上げるかたわら、自然出産により生まれた子供らに"伝統"と世界のなりたち、神話や伝承を教えた。

数代を経て危機が訪れた。星外からの訪問者との接触によって奇病が流行し、子供達の生命が脅やかされた。外貨を持たない彼らは全滅か外界への帰属かの二者択一をせまられて、第三の道を模索し、すでに開拓の進んでいた惑星の半面を一企業に割譲することで治療薬を購った。

以来、惑星《緑》には、赤道地帯をはさんで一惑星上に二政体が同居するという、星連史上でも稀な状況となる。

北半面への新たな入植者達は反エリスウェサを唱え、一切の階層身分制を拒否するとの理念を掲げていたが、ほどなくして学閥官僚主義による一党独裁体制となり、南半面の《緑》とはほとんど交流を持つことなく独自の発展を遂げた。

エリスウェサ体制の圧迫を受ける汎銀河協商圈より脱けて無法者となり、星海王軍に身を投ずる者の多く出た時代、外銀河との交易路が寸断され、以後、コストの面から忘れられていた系内資源の需要が飛躍的に増大した。

捨て値同然で払い下げられた《緑》でさえそれは例外でなく、それまでは極冠の永久氷切り出しの際の副産物、公害対策の必要な余計者でしかなかった微量の鉱物類が、《緑》特産の植物性薬剤と共に星外輸出の採算ルートに乗ることとなった。

この時点で一族側は地道な蓄財による北半面の買い戻しを決意し、一方で、都市型工業文明を發展させていた北側政府は既に自領の資源を枯渇させていた事から、南半面の併呑を目論むようになった。

エリスウェサ体制への内外からの批判が高まり、自治制復活を主張する星圏が増えるのに比例して、《緑》における情勢は、これからの成り行きの指標になるとして近隣諸政体の注目を集めた。

《北》の軍備・国境偵察の増強や外交策など、もはや武力併合の意図は明らかであり、《緑》の一族の長老会議は戦時特例として、慣習及びエリスウェサ契約の一部を廃棄すると決議。《北》政府を惑星上から放逐するまではいかなる変更も辞さないとして、短期間に科学化・軍編成を進め、外界への留学生を派遣するなど、体制下における特殊自治区法規を一蹴してのけた。

惑星を二つに分けての国境線を展開するかたわら、《北》領内の反政府勢力とも結びついた《緑》は、生体改造による一大雑種の特殊生物相と季節風とを活用して、開拓の進んだ《北》の農耕地帯を数世代かけて再び砂漠化する策を選んだ。

一族の言語で "時の智慧" と同義である "砂" の包囲線は、半野生化した砂獣の守護を得てゆっくりと北上し、食糧自給の途を断たれた《北》政府は、最終的に外界への帰属を余儀なくされた。

その後、惑星《緑》は、自らの内に旧《北》領民自治区を内包しながら一切の外界からの自主独立を宣した。それはまたエリスウェサ最内部からの後継者群離脱と時を同じくし、宇宙の趨勢を決したひとつの道標となった。

(⇒特殊自治区法規の項参照)

[◎ 神話および文化 \(1990.12.26.\)](#)

2017年4月7日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(1\)](#)

1990.12.26.

◎ 神話および文化

この世の究極のありようは「誰かたちがお互いに見続ける "夢" の永久連環だ」とする彼らの世界観は、象徴的に、無数の花びら形からなる緑色の輪二重環によって示される。

その全体の投影である諸相は、六元素のうちの「何かひとつが足りない」ことによって、人の魂に見えてくるのだと言う。

例えば、惑星《緑》に存在するのは、火・水・風・土一時・生の五元素で、残りのひとつ、"無" が足りない。宇宙には、無は豊富にあるが、生が足りない。というように。

すべてのものの引き合う中心にこそ完全なるものは在り、魂は彗星のような軌道を描いて繰り返し "欠けたる部分" を旅することによって自らを高めてゆくのだ、というのが彼らの哲学である。

無が足りない惑星《緑》上の残る五つの元素には、それぞれ男女の性別を付与された一対ずつの神格がある。太陽神ハ=ライ (男性形) と陽光神ハ=ラエ (女性形)、大河の精スウェンナ=ラー (女性)、大気中の雨・霧などを司り "水主" と呼ばれるスウェンザ (男性) など、おのおのの元素のかたち (象) として目に見える側面と、捉え難い側面とを表わしており、また対者となる互いの間柄も、夫妻・兄妹・親友といった、人間関係の各要素を示している。

《緑》の南半球における気象と水量は、彼らが "在郷" の象徴とする大河を形成するには条件が厳し過ぎた。代用として彼らは、大河の精スウェンナ・ラーの瞳を形どった《碧湖》を造成し、その四囲に首都イエラクシャバ・ランパッカップ (⇒イエラック (緑) +シャブ・ア (一族の) +ランプ・ア・カプ・アブ (祭り／市日の場) を定めた。

乾期には《祭市》の全体を天蓋で覆って湿度を一定に保つ。その間、限られた空間

に暮らすのは妊婦と新生児、老病者などや、その世話に居残った者と、千人足らずの都市定住者（行政・通信要員、学者・教本作成官、神祇官、その形式上の衛士など）のみである。

雨期の訪れと共に天蓋は外され、惑星最大の貯水槽である《碧湖》に水が満ちる頃。放牧獣の出産と野生の砂漠豆の収穫を終えた一族すべての者が《祭市》に帰って来る。

祝祭の始まりである。

湖を囲む盆地一杯に夜営する者たちは、《祭市》の環状路すべてで開かれる交易市や歌舞などの催しものに連日でかけてゆく。《碧湖》の中央には巨大な屋形が設営され、湖面一帯にすべての小舟が引き並べられて回廊よろしく固定される。

屋形では朝夕に各支族の連舞が奉納されるが、昼間は唯一の行政・司法機関である長老会議が開催される。長老会議での発言権は、一定の年齢に達した者あるいは二人以上の孫を持つ者に与えられ、挙手権は成人の式を終えた者あるいはその以前に婚姻して子を持つ夫妻に与えられる。

その他の者は傍聴し、拍手や野次によって意見を表明する権利を認められているが、長老会議に先立つ支族会議でおおむねは吸収・調整されているので、よほどの問題でない限り、年少者は婚姻の相手を探すことに気をとられていて会議の場へはやって来ない。

婚姻もしくは養子縁組による転籍は、同時に職業の選択をも意味している。

最多数派である《緑》と都市定住者である《白》および《黒》、極冠氷の切り出しと運搬に携わる《青》、などは互いに全く異なる生活形態を有しているが、幼少児には《祭市》内で共に教育を受けること、また婚姻が早く、適応力が最も高い時期に転籍が行なわれる事などから、各支族間での交流は比較的円滑に行なわれている。

## 惑星《緑》における十二神 (1990.12.26.)

---

### (惑星《緑》における十二神)

2017年4月7日 リステラス星圏史略 (創作)

- ・ 太陽神 ハ=ライ (男)
- ・ 太陽神 ハ=ラエ (女) (⇒親友)
  
- ・ "水主" スウェンザ (男)
- ・ 大河／太湖の精 スウェンナ・ラー (女) (⇒恋人)
  
- ・ 強風／季節風 ク・フウ (男)
- ・ 大気／微風 カ・ファ (女) (⇒親子)
  
- ・ 土／耕地 アフィレ (男)
- ・ 砂漠／砂 アフィラ (女) (⇒兄妹)
  
- ・ 死 (充足・回帰心) ヴァイリシュ (男)
- ・ 生命 (不足・好奇心) ウェラ (女) (⇒敵対者)

※「無」の二神には性別はなく名前もない。間柄は"他人"。

1991.01.03.

「この案を採らねば確実に滅びる。採っても確実に滅ぼされる。

おなじ張るなら、でかいカケのほうが面白いもんじゃないのかね。」

二十余の星圏が自治制度復活の請願をエリスウェサ体制に対し提起していた頃、《緑》はいち早く、しかも何らの対星外武装を持たない単惑星でありながら、エリスウェサ体制の重要要素である特殊自治区法規の破却を一方向的に通告するという形で、体制からの半独立を宣言した。

時の長老会議議長である《長老》その人の強力な指導により、戦時特例政策が施行され、それまで放牧不耕・一処不在・支族間不干渉を常としていた彼らは短時日のうちに《碧湖》周辺地に定住のための都市を築き、集団制農場とその長大な灌漑設備、食糧加工場、輸出用製鋼所、製薬工場など、自治区法によって禁断とされてきた数々の技術設備を遠慮なく購入した。

同時に、支族間の分業区分を改編し、人的資源の四分の一を割いて近代的装備と陣容とを併せ持つ国軍の編制と訓練とを急いだ。長老会議は常設されていくつもの委員会にわかれ、成人のすべてが何らかの形で軍または行政府の要職を負った。

また、鉱物・植物資源の輸出のみに限らず、外貨獲得に有効なすべての手段が実行に移された。彼らの"神話"や文学・哲学が星外向けに発行され、時事情勢に興味を持つ報道陣と同時に、好奇心と憧憬につられた多くの観光客が常時大量に《祭市》内や《碧湖》岸に見られるようになった。市街地では通年営業で交易市が開催され、劇場がきりもなく増設された。

《祭市》の日常はかくて永遠に続く祝祭日のごときものとなり、また事実...彼らは戦時特例をこう呼んだ。

ランパ・イエルバ。...《祭の準備》と...





延命措置をとらない彼らの《長老》が二度代替わりをする間、《北》では穏健派の政党長が首班の座を占めていた。従って表向き、両国の間柄は友好協定によって保証されており、相互に大使館を置き、交易もわずかながら行なわれていた。

その当時、以後何千年に渡って不世出・無二のと形容され続けた天才的な踊り手、《白》の一族のハラエ・ガーウィッシュが出た。彼女の舞う国民叙事詩『スウェンラー』は星内外の...ほとんど銀河系のすべての星域で愛好され、これも掟破りである星外公演、映像ともに、莫大な利益を《緑》にもたらした。

彼女は終生、婚姻する事はなかったが、友好使節として《北》へ公演へおもむいた際、受け入れの総指揮にあっていた外務次官、デアマト・スウェイリヒと恋に落ち、男子をもうけた。

スウェンザと名付けられた子供の父親を誰も知らされなかったが、ハラエ（陽女神）の息子、というだけで国民はみな彼をも愛した。

大柄で豊かな体躯に見事に波うつ黒い巻き毛のハラエにはまさに女王の風格があり、同じ色のつややかな直毛を長く伸ばした愛らしい利発な王子との一対は、民族の象徴ともなっていた。

同時にスウェンザは、喋り始めると同時にその高い知能をもって周囲を驚かせ、"利用できるものはすべて"を信条とする戦時特例に従って、母譲りの舞踊の才の訓練と同時に集中的な天才教育が施された。

ハラエの情人でありスウェンザの父親であるデアマト・スウェイリヒは《北》の外務官僚として年に数度《祭市》を訪れる度に一緒に過ごしていたが、スウェンザが十三歳の年に二人を強引に自国へ連れ帰ろうとして激しく言い争いになり、息子を奪われるまいと銃を構えたハラエを射殺してしまう結果に終わった。

「この国とわたしと、どちらを愛しているんだ。」

「ではあなたは、あたしのどこを愛しているっていうの？  
この国はあたしの一部。あたしはこの国そのもの。」

残されたスウェンザは軍の中央高校に入寮し、ほどなくして大学に移った。

十五歳で異例の星外留学を果たし、クエラッツ第三惑星ヌエロムで七つの博士号と十二の修士号を取得、総合科学師の称号と、滞在中全年度の舞踊芸術賞を総なめにして、十九歳で帰国した。

この間、《北》では政権の交代があり、強硬派による恐怖政治が始まった。要職を得たスウェイリヒの指揮による破壊工作がひんぴんに行なわれ、スウェンザの帰国式典では、その婚約者ティア・アトレスが命を落とした。

この前後、スウェンザ・ガーウィッシュの護衛隊長の任に着き、公私ともに生命を守ったのが、ハリ・シュヴェルシュ。後年、彼らの太陽神たる "ハライ" の名で呼ばれることになる男である。

ハライとスウェンザとの出会いは九歳と六歳の時だった。

年間を通じて "祭りの準備" ランパ・イェルバと呼ばれる賑わいを見せる《祭市》だが、今でも一年に一度、最も気候の良い時期に、昔ながらの全部族の連舞奉納が《碧湖》の屋形船を舞台に行なわれる。最多部族・緑と、最小部族・白の、それぞれ代表の舞手として選ばれた二人はその日、初めて顔を合わせ、子役の伝統舞 "ハライとハラエ" を奉納した。

陽光神ハラエの装束のスウェンザはどう見ても絶世の美少女にしか見えず、一心なハリ・シュヴェルシュは舞台が終わるとその足で相手を追いかけて求婚したという。

六歳にして、はるかに成熟した知能と感性を持っていたスウェンザは笑って、母の真似をして「ウェイティング・リストに載せておく」と答え、ことと次第を報告して周囲の大人たちを大いに沸かせた。

( "共に生きる者" の相手の性別に関しては、この星はまったくこだわっていない。 )

一方で、うかつにして相手の正体を知らずにいたシュヴェルシュ家の五男坊は兄達や年若い叔父達にさんざん馬鹿にされ、「ハラエ・ガーウィッシュの息子スウェンザに釣り合おうと思ったら、ハライ (※この場合は「部族一の英雄」ほどの意味) にならねば無理。」と、幼い初恋にあっさりにとどめを刺されたが、しかしそんな事では全然、ハリ坊やはあきらめたりはしなかったのだった。

再会を果たしたのは十七歳と十四歳。軍立の中央校に一浪してすべりこんだ入寮の日、ちょうど大学寮へ移るところのスウェンザとすれ違った...という、いささか情けないものである。

それでも写真的記憶力を誇るスウェンザは彼を覚えており、「いまのところリストには七人並んでいるよ」と、笑いかけられて有頂天になった若き日のハライが、以後、ひとめ想い人の顔を見たさに、終末になると片道二十分を自転車ですっ飛ばして大学寮へ通った...というのは有名な語り草である。

翌年、スウェンザはヌウェロムへ留学し、ハライは警備兵として軍務に就き、その人望と統率力から順当な昇進を遂げ、スウェンザ帰国の際には自薦他薦その他の候補を押しつけて護衛隊長の任を手に入れた。

既に他星圏では見られなくなったような旧式の往復機でスウェンザが帰星し地上に降り立った時、婚約者ティア・アトレスは私人の立場として、他の要人達とはひとり離れて送迎路の先端に立っていた。五年ぶりに再会した恋人達が互いに駆けよろうとするまさにその時、明らかにアトレス嬢に狙点を定めた迫撃砲が飛来し、救おうとするスウェンザの目前でティア・アトレスは一命を落とした。

これは、高名な芸術家でもあるスウェンザ本人を殺害した場合の外交問題を顧慮した《北》軍が、スウェイリヒを通じて最も有効なスウェンザ潰しの策として強行させたものである。

この事件を契機として、もはや即発状態だった両国間の緊張は限界を超え、《緑》の側からの即日の宣戦布告と同時に、両首都間の最短路上において戦端が開かれた。

騒然とする宙港から、半ば自失した状態の彼を引きづって私宅に送り届けたのはハライであるが、実父スウェイリヒの推測通り、最愛の恋人を護りえず目前で殺され、しかもそれを自分のせいと知ったスウェンザは深く己れを責め、一切の公的責任を放棄して、私宅に閉じこもったまま飲食を断ち、発狂もしくは自殺の寸前まで自身を追い込んだ。

"ハラエの息子"を深く敬愛するあまり誰もが何らの手も打てずにいる間に、護衛隊長であるハライは職権を応用して私宅内に立ち入り、いささか強引な方法ながらスウェンザの自責の念を正当な怒りに転化させ、《北》への復讐戦に参画するよう、説得に成功した。

スウェンザは最高参謀として、ヌウェロム滞在中から通信による指示で建設させていた人工知能、有機中枢アフィラの内部へと居を移し、軍・民、双方の長期策の立案に没頭。

一方、強引に性行為を求めるといって彼を正気に返らせたハライは、相手の生命を救うという目的は果たしたものの、自分の手段が許されることは決してないだろうと悟って絶望し、護衛隊長の任を退き、一兵士として最前線に身を投じた。

(未完)

(参照したければ資料)



<http://85358.diarynote.jp/201704071747328965>

[◎ 戦時特例史略 3 ◎ \(1991.01.03.\)](#)

2017年4月7日 [リステラス星圏史略 \(創作\) コメント \(3\)](#)

(草稿 & 没原稿)

---

(草稿 & 没原稿)

(借景資料集)



(借景BGM集)

---

(参照したければ資料)

(随時増殖中)



<http://85358.diarynote.jp/201704071421495890/>

(借景 B G M 集)

『惑星《緑》の物語』

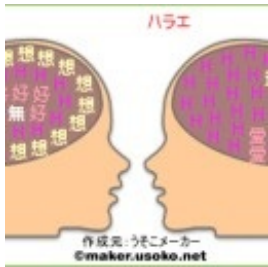
2017年4月7日 [音楽](#)

「昔の名前で出ています.....☆」 (^^;)” 2008年11月22日

---

「昔の名前で出ています.....☆」 (^^;)”

2008年11月22日 [恋愛](#)



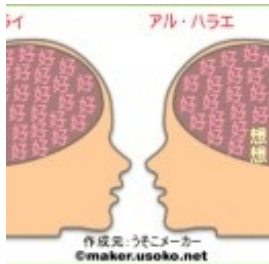
前世の名前 (w) の一つでやってみた☆

う～ん☆ あたってる!! (^^;)

[http://maker.usoko.jp/nounai\\_ai/](http://maker.usoko.jp/nounai_ai/)

[古ネームでやってみた☆](#)

2008年11月22日 [恋愛 コメント \(1\)](#)



いかん☆

はまりそうだ.....☆

(^◇^ ; ) ”

(そろそろ仕事に戻りま〜すッ☆)

[編集する](#)

コメント



[霧木里守≡畑楽希有 \(はたらけきあり\)](#)

2010年9月18日11:14

.....いま気がついたが、これ、「いいふーふの日」だわ.....

w (^ ^ ; ) w

いや、どーでもいいが.....

どお〜でも、いいことなんですけど.....

(なんかものすごくむなしくね??) (= = ; )



リステラス星圏史略  
古資料ファイル  
8-2  
『惑星《緑》の物語』

<http://p.booklog.jp/book/114083>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114083>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト